

を通して、魔力が魔法となって放出されている。ザガンの能力である命魔法的な何かには違いないが、それが何なのかはよく分からない。

やがてルフたちはいっせいに移動を始めた。白龍が部屋から動いたのだ。ジュダルは浮遊魔法で屋根の上に飛び上がり、回廊側に出て白龍の姿を追った。すぐ隣を白龍が悠々歩いているというのに、青舜は相変わらずぼーっとしている。よく見ると、ゆったりと禁城の大門に向かう白龍の義手から大ぶりの花がいくつか「生えて」いた。毒々しい色をしていて、恐ろしく下品な感じの花だ。少なくとも帝都では見たことがない。おそらく南国の花だろう。

結局白龍は衛兵に見咎められずに堂々と大門を通り抜け、まっすぐ城下へ向かっていった。そろそろ夜が明ける、というところだ。ジュダルは浮遊魔法で宙に浮かんだままその後をつけていた。箱入りの皇子様が足を踏み入れるとは思えないような汚い路地へ躊躇もせずに入っていく、少し行ったあたりでどういいうわけか急に足を止めて斜め上を振り返った。

「何の用だ、こんなところまでつけてきて」

浮かんでいたジュダルは足先をぴくりと動かし、にやりと笑う。

「へー、気づいてたのかよ？ やるじゃんお前」

「馬鹿にするな」

白龍は鼻にしわを寄せ、思い切りにらんだ。

「姉上に頼まれたのだろう？ 『神官殿』がわざわざお出ましになられるとは」

「分かってんなら自分で白瑛に説明しろよな。ガキかよ、ったく」

ゆっくりと地面に降り、白龍と同じ目線に立つ。だが地面がどろどろだから素足をつける気にはなれなくて少しだけ浮いたままだ。この乾燥した帝都にあるというのに湿っぽくて腐臭じみた匂いがして、特に潔癖というわけでもないジュダルですらあまり長居したいとは思えない場所だった。

「で、何してんだよこんなところで。こんな汚ねえとこ耐えられねーだろ、お前みたいな『皇子様』には」

「お前に話す理由はない」

「はん？ やっぱここに女でもいるのか？ でもよお、こんなとこに來なくても皇帝が死んだんだから後宮の女ぶんとり放題じゃねーかよ。変な趣味だな」

ジュダルは適当にそう言ったが、実際は後宮の女やその子どもたちなどとくに玉艶が始末している。

「ああもしかしてお前、お高くとまった女じゃだめなんだろう。まともに飯も食えねえ、そんな冠なんて見たこともないような女じゃないとだめなんだろう。そんな女なら、お前が何にもできない情けねえ男でも笑って言ってくれるもんなあ、『ありがとうございます』ってよ」

「神官殿」